

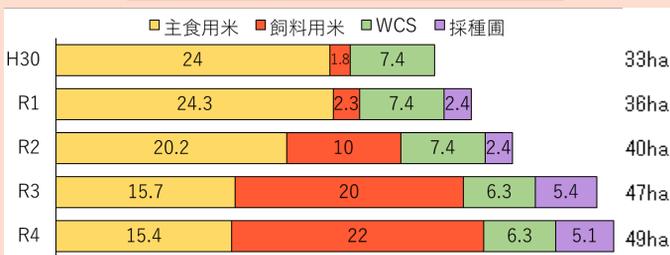
○旭市嚶鳴地区では、水田を手放す担い手が増加している中、地域の座談会等の活動を通して、平成30年10月に(農)おうめいワクワクお米クラブ(以下、「ワクワク」)が設立された。  
 ○ワクワクが地域水田を継続的に支える営農組織として発展するため、組織運営方法の確立、生産基盤強化、地域担い手と連携した農地集積・集約に向けた支援を行った。  
 ○その結果、**経営面積は法人設立から4年間で16ha増加、収入は3年間で約1.7倍に増加した。**また、ワクワクや地域担い手と水田所有者との間で農地集積・集約の話合いが加速化している。

## 具体的な成果

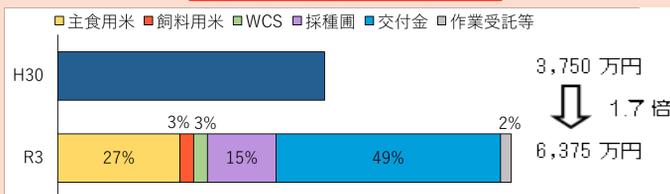
### 1 営農組織の規模拡大、収入増加

■組織運営、作業体制の確立や生産基盤強化により、経営面積が拡大、収入が増加。

#### 経営面積の推移(H30～R4)



#### 収入比較(H30、R3)



### 2 農地利用調整機能の創出

■アンケート調査をもとに作成した地図を活用し、嚶鳴地区の将来像について共有。営農状況が可視化されたことで、集落内で農地集積等の話し合いが加速化している。

#### 保全会事業区域内の水田利用状況地図

(左:現状、右:10年後予想)



## 普及指導員の活動

令和元年

- 組織運営のルールづくりを提案。**
- 種子生産による収入増を図るため、同地域にある**採種組合の担い手へと誘導。**

令和2年

- 圃場管理システムを導入し、組合員が所有する水田の面積、品種を見える化。

令和3年

- 県単補助事業(農産産地支援事業)を活用し、55ha規模のライスセンター導入支援。
- 経営課題の整理により問題意識が向上**し、農業経営基盤強化準備金制度を活用し、機械更新・取得に向けた資金確保を実施。

令和4年

- 「人と農地の問題」を考える座談会を開催**し、嚶鳴地区の将来像について地域担い手及び地権者と共有。
- 経営リスク回避のため収入保険の推進。

## 普及指導員だからできたこと

・水田利用状況地図を活用し、現状と10年後の地域水田の状況を効果的に示すことにより、**課題を共有**することができた。

・普及の活動の中で直接農業者と接する機会を多く持っていたことが円滑な問題解決につながった。

千葉県

## 組織運営のルール確立及び地域と連携した 営農ビジョン検討による営農組織の経営発展

活動期間：令和元年度～継続中

### 1. 取組の背景

旭市は、野菜等＋水稲という複合経営が大半であり、主力品目が水稲以外の経営体では水田を手放す担い手が増加している。特に嚶鳴地区においては、水田が 350ha あるにもかかわらず営農組織がなく、地域水田営農の維持に向けた活動が急務となっていた。

上記の課題を解決するため、平成 29 年 2 月から農業事務所と関係機関が連携し、担い手の掘り起こしや組織化の機運があった担い手 5 名と水稲経営の協業化に向けて協議を行った結果、平成 30 年 10 月に農事組合法人おうめいワクワクお米クラブ（以下、ワクワク）が設立された。また、法人設立と同時に環境保全会組織も立ち上がった。

そこで、ワクワクが地域水田を継続的に支える営農組織として発展するため、組織運営方法の確立、将来の経営面積増加に備えた施設や作業体制の整備等に取り組む必要があった。また、地域の水田農業を守るためにワクワクを核として地域担い手と連携し、環境保全会を活用した土地利用調整の仕組みづくりを目指した。

### 2. 活動内容（詳細）

#### （1）組織運営のルール確立

ワクワクでは組合員個々の経営面積に大きな差があり、組合員の水稲経営を法人で一本化してしまうと、収入が減少する組合員がいることが予想された（同市の営農組織において、同様の理由で解散した事例があった）。

そこで、組合員が所有する機械を利用した場合の労働対価や共同で作業した場合の従事分量配当の考え方によるルール案を提案し、組合員間の不公平感を解消しながら、ワクワクへの集積を進めた。

#### （2）規模拡大に対応できる生産基盤強化

##### ア 県単補助事業を活用した乾燥調製施設の導入支援

今後の規模拡大に対応するため、乾燥調製施設の拡充が必要であった。事業活用に向け、県内の先進事例視察（写真 1）や市・JA と事業計画の協議等による導入支援を行った。さらに、乾燥調製施設の導入をきっかけとした法人への農地集積・集約を見据え、市・園芸協会とともに農地中間管理機構を通じた貸借について、ワクワクとの協議の場を設けた。



写真 1 県内のライスセンター視察

イ 圃場管理システムを活用した移植・収穫作業及び生産管理の省力化

設立後すぐは組合員間で水田の場所、面積、作付品種が共有されていなかったため、品種構成や田植え・収穫作業計画の検討が困難であった。そこで、令和2年に圃場管理システムの導入を提案し、圃場の可視化を図った。

(3) 経営安定化に向けた支援

ア 採種組合への参入

種子生産による収入増を図るため、令和元年に同地域にある採種組合の担い手へと誘導した。また、長期的に水稻種子の安定生産を行える担い手とするため、採種圃の団地化に向けた農地集約や地域生産者との農地交換を促した。

イ 経営課題の整理と解決策への支援

毎年収穫後には各作業や経営に関しての振り返りを構成員の夫婦ぐるみで行い、作業体制や栽培管理の役割分担の見直し等の課題を確認し、それに対する解決策を検討している。また、経営リスク回避のために収入保険の加入を推進した。

(4) 保全会・関係機関と連携した地域営農ビジョン作成支援

近年、嚶鳴地区では、ワクワク及び大規模個人経営体3戸への農地集積が急速に進み、分散錯圃の対策が新たな課題となっている他、入耕が多く、話し合いが進まない状況であった。そこで、地域水田における農地集積・集約のあり方を検討するため、市・保全会と連携して、地区内外の水稻生産者及び地権者43名に対して、水田利用状況及び担い手の意向把握のためのアンケート調査、事業区域における水田利用状況地図の作成、「人と農地の問題」を考える座談会を開催した。



写真2 保全会三役との打合せ

### 3. 具体的な成果（詳細）

(1) 営農体制の確立

ア 組織運営のルール作り

各作業に掛かる労働対価や配当金の分配方法について、県内の先進的な法人の視察や担当会計士の助言により、作業毎に細かく料金を設定した従事分量配当表の作成及び分配方法のルール（面積・従事割合、理事手当、支払時期等）を定めた。また、法人経営の安定化（運転資金や準備金等の確保）を優先し、個人利益は長期的に考える等、組織運営のルールが確立された。

イ 生産基盤の整備

令和3年度に県単補助事業（農産産地支援事業）を活用し、既存の乾燥機と併せて55ha規模のライスセンターが建設された。また、圃場管理システムで組合員が所有する水田を耕作者・品種毎に色分けした地図を作成したことで、作付状況が明確となり、飼料用米20ha及び採種圃5haの団地化

に繋がった。さらに、圃場の場所や管理記録を組合員間で簡単に共有できるため、情報伝達が正確になり、計画通りの移植、収穫が可能となったことで作業ロスが削減された。

ウ 課題解決意識の定着

月1回以上の経営状況確認、毎年の反省会を通して資金繰り等の課題を整理することで、構成員全員の経営に対する問題意識が向上し、課題解決に向けた取組みが行われている。令和3年度決算から農業経営基盤強化準備金制度を活用し、計画的な機械更新・取得に向けた資金確保を実施している。また、令和4年度に経営リスク回避のため収入保険に加入した。

エ 上記成果による営農組織の変化

これまでの様々な支援により、経営面積は法人設立から4年間で16ha増加しており、品種構成は主食用米から飼料用米への転換が進んでいる（図1）。また、法人設立前と令和3年度の収入を比較したところ、3年間で約1.7倍、収入金額が増えている。さらに、採種圃による収入は約1,000万円となっており、経営の1つの柱になっていることが分かる。以上のように、ワクワクは旭市内でトップレベルの営農組織に発展した。

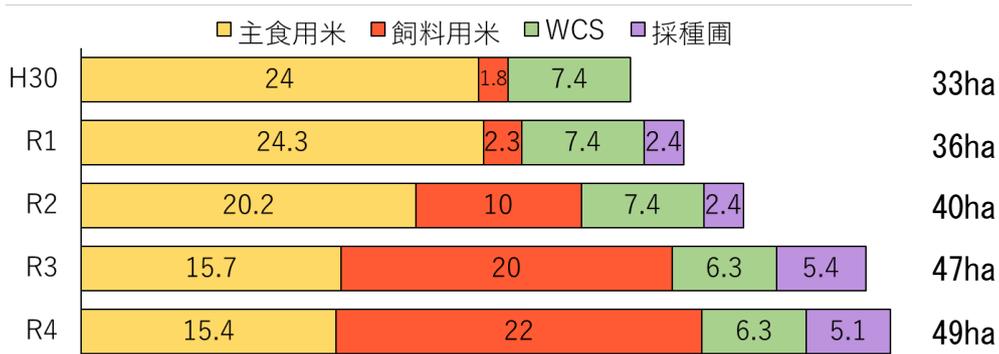


図1 経営面積の推移 (H30～R4)

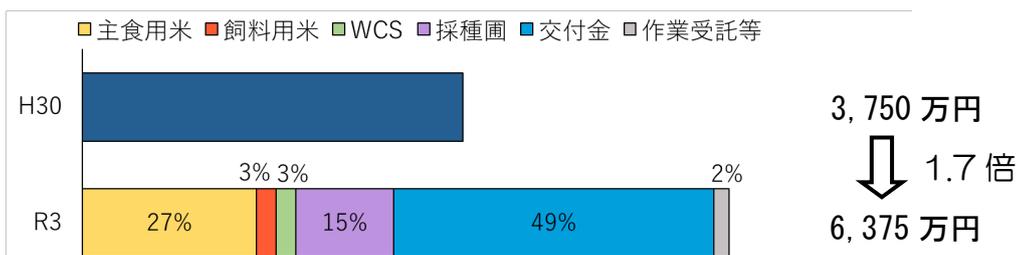


図2 収入比較 (H30、R3)

(2) 農地利用調整機能の創出

保全区域内の水田利用状況地図（図3）を活用し、嚶鳴地区の将来像（10年後の担い手の数や年齢、縮小意向のある担い手と面積等）について共有できた。参加した担い手からは、「10年後には50歳未満の担い手がおらず危機感を感じた」、「嚶鳴地区の将来展望を考えていきたい」等の反応があった。また、保全会事業区域の営農状況が可視化されたことで、現在もワクワクを含んだ地域の大規模経営体と縮小意向のある担い手の間で農地集積等の話し合いが加速化

している。現在、ワクワクの集落内の集約率は、約 37%となっている。

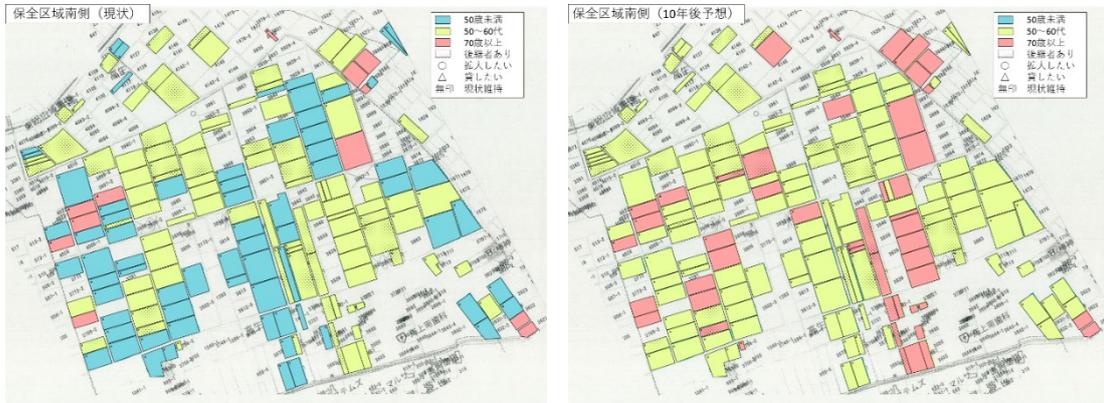


図3 保全会事業区域内の水田利用状況地図（左：現状、右：10年後予想）

#### 4. 農家等からの評価・コメント

（（農）おうめいワクワクお米クラブ 代表理事 ○氏）

法人、環境保全会の設立・育成にあたっては、農業事務所をはじめとした関係機関の支援のもと、地域水田農業を守りたいという思いを形にすることができた。また、経営に関する指導を通して、法人運営を軌道に乗せることができた。

#### 5. 普及指導員のコメント

（海匠農業事務所・普及指導員・山本一浩）

本取組みは、地域水田農業を支える中心的水稲経営体への農地集積・集約を見据えた環境保全会の設立および受け皿となる営農組織の設立に向け、農業者やJA、市役所等の関係機関との綿密な合意形成が取組みの成果を上げる下地となっている。また、設立した営農組織が継続的に地域水田を支えていけるよう、組織運営のルール作りや県単補助事業、スマート農業の活用による生産基盤の整備を通して、経営体自らが課題解決意識を持って活動できるようになっている。農地利用調整については、保全会設立時に農業者との合意形成がなされていたことと、普段の活動の中で直接農業者と接する機会を多く持っていたことが円滑な課題解決につながった。

今後もさらなる産地の発展につながるよう関係機関と連携しながら活動を進めていきたい。

#### 6. 現状・今後の展開等

##### （1）ワクワクの今後の方向性と課題

今後もワクワクには地区内外からの農地集積が進み、営農組織の重要性は年々増していくことが予想されるため、計画的な機械取得、省力化技術の導入、雇用受入体制の整備を支援していく。

(2) 旭市水田営農の今後の方向性と課題

- ア 令和5年度からは市農業委員会と連携しながら地域計画の策定を進める予定であり、ワクワクを含めた担い手への利用集積を計画的に行い、効率的な水田営農を展開する。
- イ 地域計画策定の中で本事例を他地域にも波及させ、担い手の発掘と土地利用の合意形成を進め、第2、第3のワクワクを育成し、旭市水田営農の発展につなげていきたい。